

物語と教育

原 野 利 彦

Story & Education

Toshihiko HARANO

【問題意識】

現代ではすべてのリズムが錯綜しているために、いかなるリズムによって秩序を構成していくべきであるか、ということが不明である。「情報社会に生きる力を養う」などという教育的スローガンもその内実が不明である。本稿は、如何なるリズムが新しい教育に要求されているかを探ろうとする試みの一つである。

今、民俗社会への *nostalgia* が流行している。民俗社会では、時空間の輪郭が明瞭であり、宗教現象学のいう「聖なる時空間」が韻文などによってリズムをつくり、これが秩序づけの力を持っていた。これが様々な期待をこめて回顧されている。確かに、散文ですら現代では秩序づけの力をもっていない。かつての産業社会においては機械的時空間、つまり科学的・実験的時空間が秩序づけの力を持っており、つまり散文的リズムが秩序づけの力を持っていた。例えば、小説、上映時間（1時間半）、労働時間のリズムとして。

だが、情報社会の時代ともなれば、時空間の輪郭は不明瞭となり、聖俗の入れ子状態が現出する。つまり《特殊な文化にすぎぬ西欧文化が、全世界の正統な基準になっていることの揺らぎ》が起こる。西欧文化を非領域化する視点が多様に現れる。韻文・散文の秩序が弱化し、〈始—中—終〉が不明瞭となる。ここでは相互に非領域化する異なった力同士が「解体」「ズレ」を内容とした *interface* を作る。各種の「物語」、つまり *system*, *simulation*, 神話などは還元力をもたぬソフトなものとなる。力が犇めく場（自己・社会）が力学＝近代の図式による理解の仕方を超えて、演劇の場（自己・社会）として「解釈の場」、「現象学の場」と化すことが求められている。だが、かかる事態にたいして、我々はいかなる立場を確保すべきだろうか。

確かに我々は現実を秩序づけるために何らかの尺度を必要とする。かつて人々は〈始—中—終〉、序破急、起承転結、因果、宇宙の4大元素などを抽象して「虚構の時間」を構想し、この必要を満たそうとした。これを「尺度にして」日常性を秩序づけることによって恐ろしい不可解な力から生活を守り、新しい力を得ようとした。だからこの虚構の時間は「内的緊張の世界」でなければならなかった。

現代人はこれに応じるに、「有効性」をもってした。この「有効性」という *fiction* のもつ内的緊張感は、大きな現実性を帯び、これに対応することは実証的・実験的科学によって可能だとされてきた。教育「科学」もこの例外ではない。我々はこの「現実」を「刻まれ」「分割される時間」として、記憶し、計画し、*curriculum* 化してきたのである。

【均質的時空間の中での偽装された自由ではなくて、異界への出口を見出すこと】

我々の言う「個性」は、現代においてはそれが如何に「質的差異」を捉えているように見えても、均質化への強化を意味する。それが有効性を競い合うという等質性を前提にしているからである。近代における個が契約という一般性を前提にしている限り、たとえば、葛藤・矛盾といった「弁証法」的發展と称する「進歩」の pattern も、異質性の統合という外見を装う等質的なものどうしの蠢きにすぎない。だが、この有効性を競い合うという等質性は或る図式に支えられた *Ressetimen* に基づいていることがわかる。

それは、父母の養育による、父母の乗り越えを目指す、新しい家族の再生産、という図式である。向上心、豊かな人間性など、どれを見てもこの図式の再生産である。^① 教育はこの記憶によって領域化された認識による支配とそれによる hierarchy によって支えられる。教育の「目的」概念による統制（「授業のねらい」等）、「筋 plot」化された教育過程（〈始—中—終〉、〈序破急〉などの構図をもって、〈導入—展開—結末〉という授業の pattern の常態化すること等がその実現形態である。

このようなきまりきった pattern に領域化されていく過程で、子供たちは様々な反応を示す。或る場合には、彼らは教師の話や動作の意味に反応しているように見えるが、実際に彼らの注意を引くのは、意味を欠いたリズムや純粋な音のマチエール、叫び声などである。教師は教育効果を見るために彼らの反応の「意味」を探ろうとするが、それらが的外れであることが多い。なぜなら、その場合、子供にとって重要なのはそれらのリズムや音の強度だけであり、彼らにとっての意味とは彼らのリズムの強化をもたらしものか否かの違いだけだからである。

ここから、教育の基本的 pattern を何らかのフォルム化されたものに求め、万人にとって価値あるものを教育するという前提の自明性を越えて、それ以前の状況を教育への考察の出発点にすべきことの必要性がわかる。種々の「教育的解釈」や常識的な「観念連合」、精神分析学的「元型」などに還元された「教育的意味づけ」が越えられなければならない。つまり「象徴的な構造を破壊する」ことが必要となる。だから、教育の原型を民俗社会における initiation や諸々の「旅」にモデルを求め、近代的因果律に範をとった学校教育における過程のモデルを越えようとしても、そこには近代的モデルからの脱出口はない。^②

なぜなら、そこに要求されている基本的 pattern は、近代的「理性」の再生産という記憶に基づく思惟であるからである。それは有効性という社会的基準に従属した家族の再構成という図式に基づく思惟である。それはこの図式を実現せんとする「現実に生きる苦悩」の洗礼を受け、その苦悩の刻印力によって記憶を可能にし、「内面化」することこそ人間化への過程であるという前提を疑わない。「教育目的」によって統制される筋立て *emplotment*、〈始—中—終〉、〈導入—展開—結末〉は皆この基本的性格を根底に持っている。近代人はかかる理性によってのみ人間の生が「義認」されることを現実に証するものとして教育があるという構図すら生み出した。

だから、「教育的諸問題」は、まさにこの図式を巡る攻防の表現だといえる。「諸問題」を近代的理性によって制約を乗り越える「自由」というものだとのみ捉えるならばこの枠組み自体が見えない、つまり自己言及を欠いた議論となろう。しかし「教育的諸問題」はこのような制約から、こっそり姿をくらすための脱出口への模索であるという側面を必

ずもっていることを見落としてはならない。その場合、それは理性によって有効性を保証される脱出口ではなく、「可能な限り最も意味のない出口」という性質を持つ出口なのである。

「可能な限り最も意味のない出口」を子供たちが求めるという側面に注視した場合、そこから何が見えてくるか。それは「意味ありげな価値のもつ低俗性」からの脱出をはかる行為ではなかろうか。人は低俗な価値を批判すると称する教育を施す。だが、その批判の根拠や動機が有効性のみに係わる理性を培うことだとするならば、^③それが低俗ではないという保証をどこにも見出せないのではないか。もしそうならば、その場合、子供は「可能な限り最も意味のない出口」を求めざるを得なくなる。

子供が「意味のない」反応をして授業が成立しないのは、生きいきした授業が工夫されていないからだとして、単なる筋を追う授業過程が批判されたりする。だが動機づけられた授業（生き生きした授業）を展開するという筋立て *emplotment* が低俗なものに終始しないと言っている根拠は何かということに対する言及はない。過程の急転や意外性を可能にするものが低俗から逃れるのは如何にしてか、という言及がないのである。要するに「低俗に思惟する」ことから如何にして距離をとるか、これらが問われない限り、子供たちは「可能な限り最も意味のない出口」を求めるだろう。

或る子供たちは授業中に廊下へと逃避する。これは何か。彼らは「出口」を求めているのだ。彼らにとっての「問題は自由になることではなく、ひとつの出口または入口、あるいはひとつの側面、廊下、隣接するものなどを見つけることである。」^④隣接するものとの接触によって内部と外部との境界を曖昧にしたいのだ。そうすることによって極めて緊密な統一性があるように見えていた授業が、実はひたすら有効性を求める卑俗で些細なものの寄せ集めでしかない事態＝授業を喜劇的なものと見る事態を可能にしたいのだ。「教育的 system」の統一性はきわめて曖昧なので、内側にいることと外側にいることとの差異はないことを実感したいのだ。その外見上の統一性が、よくみると卑俗な有効性の寄せ集めであることを見抜き、「根本的な分節性」をそこに見出したいのである。^④

【Ressetiment】

現代的「理性」（問題解決の知性）は、有効性という基準を満たす責任を家族や国家、教師に任せ、絶えずこの基準によって人々を裁いていくという力の表現である。だから、意味のある子供の「リビドー」も、無理やりにこの構図の中に還元されてしまう。有効性を目指して苦勞すべき「罪」を家族（父母）や国家の官僚たちが負わされている。教育の根本的構図は「有効性という基準から見れば、父母に責任があるというだけではなく、子供にも（未熟だという）罪がある。だから子供は絶えず裁かれねばならない」というものである。それは「義務教育」、「教育を受ける権利」という名において実現される。

たとえば、父親は彼の閉じ込められた *hierarchy* から脱出できなかったという理由によってのみ、子供にも従属を求める男として現れる。「お前の個性を大事にしたいから、幼少時には個性重視を認めてもやろうが、高学年になった場合には、世の中のしきたりに従って、きちんと就職し生計を支える準備をすべきだ。お父さんだってそうしてきたのだ」というように。国家は国際社会の荒波を乗り越える努力をしており、国民も協力すべきだ、という構図。こうして有効性の *hierarchy* である「学歴社会」は再領域化、再生産される。

この構図は神経症的に追求される。まさに「既に従属させられている者による、おのれ自身の従属を伝達しようとする欲望」である。「しっかり生きよ、時間を大切に、友達を大事に…」などの子供への訓戒は、おのれを従属させてきた **pattern** へ子供を強制することである。教育はこの図式を売って剰余価値を得てきた。この図式こそ使用価値である。

だが、この図式を拡大すれば、父母や教師の本来の姿が異常性を帯びて、くっきりしたものとなり、個々の断片化した場での異質の闘いが表面化する（毎日の登校を巡る個々の闘いを見よ）。父母や教師のイメージの喜劇性があらわとなる。父母や教師の与える図式の中での自由というものが喜劇的に見えてくる。そしてついに子供にとって切実な問題は、「父母や教師が見出した学校教育を受けるという図式以外の図式をどのようにして見出すのか」ということになる。かかる観点からは父母や教師を学校的図式によって乗り越えるということは、「喜劇ではあっても、悲劇ではなくなる。」^⑤

この図式の喜劇的拡大は次の2つの効果をもたらす。

① 父母像の官僚化がそれである。父母の「教育力の弱化」は、教師、裁判官、委員、官僚などによって指導された「家庭の教育力の回復」をもたらす。まさに「家族には馴染がなく、その扉を、そこから押し入る日を早くも待ちきれない〈悪しき力〉が昔からずっと叩いている」^⑥ のである。これは父母が官僚や教師に変身することである。つまり「共に解決を目指そう」という図式が可能となるのだ。こうして有効性をめざす図式の再領域化が行われる。しかもそれは、『子を持って知る親の恩』というかつての時間感覚とは異なったスピーディな **innovation** の時代感覚に適合するものでもある。

もし子供が父親を尊敬するという事があれば、事態はもっと喜劇的になる。なぜなら、父がかつて彼を打ち負かしにきた諸困難と闘ったということで子供からの尊敬を得るならば、父子は有効性を目指すべく家族の力を動員するという図式を自明のこととして認め、共通の苦悩を背負うという仮説の中に終始すること以外には出来なくなるからである。この場合、脱出口を捜す意味を子供が見出すことはさらに困難となろう。父母は子供にとって「友達であれ」とか、父親は子どもにとってのり越えらるべき「障壁」として再興すべきだと説いたり、『反抗期の復権』を説く者が現れたりする。だがその場合、喜劇性は増すだけであることは明らかである。

② 有効性の基準からの逃走線の形成…。刻々に教育的意味づけを分断し、それを単なる断片的リズム、音のマチュールに変える時、子供は断片化したマチュールを動物への変身などによって再構成する。わめき、意味不明の言動、リズムがそれである。それは有効性の基準からの逃走線を形成する。「このような逃走の線、動物への変化を構築し、体験しないような子供はいない。そして、生成変化としての動物は父の代理者とも原型（精神的な領域回復の手順）とも無関係である。」^⑦

我々は様々なフォルム、意味（意味スルモノ、意味サレルモノ）に依拠し、変身と称する模倣を行い、自分の時空間（マップ）を形成する。すべてのフォルムが壊れ、また意味スルモノ、意味サレルモノというすべての意味作用が壊れることに恐怖する。「どうしたらいいか教えて下さい」というわけだ。まだ形成されていないマチュール、非領域化した流れ、意味作用しない記号が現れる事態に対処できないのだ。「砂漠」のような荒涼たるマチュール、運動、震動、入口以外のものではない地下の強度だけの世界に耐えられないのだ。これらは「お遊戯会」での動物への変身という「幼児教育」「保育」の段階からは

じまった「人間化＝有効性」の図式による訓練の賜物である。^⑧

現代人は「個性」を標榜しつつ、見捨てられていること、いわば「孤児である」ことに耐えられないのだ。既存の境界から一步も踏み出さないことが金料玉条となる。絶対的な非領域化＝砂漠＝運動＝逃走の線を引く＝境界を越える＝純粋な強度の世界を見出すことへの耐性のなさが低俗・畜群としての人間を再生産する。^⑨

〈identity＝記憶の蓄積〉から逃走し、忘却を武器としてその都度の賭の行為にでること、これは否定的に見れば、自由を装う無駄な足掻きのようなものであろう。だがポジティブに見れば、既存の囲い込みのからの絶えざる越境であり、Deleuze の言う「力の強度」の差異の絶えざる実感である。それは〈変化＝捕獲・所有・剰余価値〉^⑩ の実感である。例えば、模倣は非平行的、非対称的な強度のひとつの連続体を生産することである。Deleuze は言う。カフカは《猿が人間になる場＝人間が猿になる場》であり、人間に捕獲された動物が人間の力によって非領域化されると同時に、非領域化された動物の力が人間の力の非領域化を急がせ、もっと強度のものにすることを示す^⑪と。つまり《模倣＝出口の探索》だと言うのだ。

だが、〈類似〉、metaphor は「人間化・有効性の基準」の再構成危険を絶えずもたらす。例えば、動物はまだ領域的、意味作用的でありすぎるため、その模倣はこの図式の再興のための強力な手段と化す。各種の「動物物語」の「教育的効果」を見てもそれは分かる。類似物、類似の領域間の network はこの図式の再興であるが故に、「地域主義の回復」は超国家的なテクノクラシーに役立つと言える。

各 system による文化的機能と指示機能は、network 化されることによって、非領域化を防止される。それは各 system の文化・指示機能が寄せ集めであり、語られうることと語られえないこととを振り分け、それを通して権力の様々な中枢が作用していることを隠蔽したり明らかにしたりすることを強化出来るからである。この network に絡め取られまいとする者は、「自分の言語（文化）のなかで異邦人」であろうとする。各 system 内で偉大なものを拒否する姿勢や、或る公認された「礼儀正しさを分裂病的に行使することなど」を貫く青少年がそのよい例であろう。^⑫

だが、「ひとつの機能を別の機能に対して働き掛けさせ、相対的な領域性・非領域化の係数が働か」すことも可能である。Deleuze はこれにより「絶対的な非領域化を形作るような強度な使用が可能である」ともいう。創造は単に語彙だけのものではない。語彙は殆ど取るに足らない。犬のように書くためには、《冷静なシンタックス的な創造が肝要である。》と。それは「叫び＝息」（アルトー）であり、「至高点における叫び声」（セリヌ）であろう。

これは「自分の言語のなかで、多言語使用をすること」、「自分の言語についてマイナーまたは強度な使用をすること」であり、別にセリーをつくることである。^⑬ 現代では教育までが精神分析のもつ「意味スルモノ、隠喩、言葉の遊びの支配者たらんとする望み」を模倣しようとする。また「少数意見の者」も、「差別的言辞」の排除の要求を越えて、公認の言語の地位を得んとする夢をもつ。このような「治療」の道具となり、制度となった言辞を越えること。また各種コンクールの簇生にも見る「若い才能の発掘」によって古いリズムを再興し、世の中の秩序化に貢献する「新しい韻文」の台頭などを警戒すること。

我々は教育を受けずにいることの不可能性の中にいる。特に近代においては教育は義務

化・権利化されており、最近では「生涯学習」の名により人々は全面的に「教育」の中に囲い込まれていく。生産基盤、生活基盤から切り離された近代人は教育体制の中で行動せざるをえなくなり、不安定で抑圧された人々は必ず教育に支えを求める。大規模な「教育論争」が起こるのも無理はないのだ。進学競争以外の教育への係わりが不可能である場合、マイナーは黒人が英語を話すようなやり方で教育用語を操らねばならなくなる。

個々の教育問題は直ちに政治的問題と短絡させられる。曰く、「地域の自然や文化を学ぶ」、曰く「生涯学習」などとして。政治的用語が教育用語に感染し、政治的見解の相違は些細なものとなり、教育用語が共通用語として微調整をはかる機能を果たしてしまうようにさえなる。^⑭

〈如何にして、自分自身の言語の遊牧民・移民・ジプシーになるか〉というカフカの問いを我々のものにしなければならない。溢れてはいるが極端に少なく貧しい我々の言語世界…これをありのままに受け取り、語彙が枯渇しているが故にそれを強度において震動させること、これが肝要である。

我々は分節化された音声を非領域化された騒音へと導き、これを意味のなかで領域回復させず、保証なしに、絶対的に非領域化していかなければならない。〈マイナーの文学はマチエールに働き掛けるのにより適している…カフカ〉ことに鑑み「意味から強奪された言語」を保護する方途を講じる必要がある。

「子供たちはその意味が曖昧にしか予感されていないような語を、それ自体で振動して響くようにさせるために、繰り返して自分に言ってきかせるという訓練がきわめて巧みである。」とカフカは言う。子供たちは、「それ自体としては意味を持たない固有名詞」をこの訓練のために役立てる。^⑮ 我々は既存の *metaphor* やイメージへの凭れ掛かりを越えなければならない。

イメージを移行そのものとし、生成変化そのものとする。我々はあらゆる指示作用とともに、あらゆる隠喩、あらゆる象徴表現、あらゆる意味作用を故意に抹殺することを心がけねばならない。教育活動がその創造性を発揮しようとすれば、その言葉は、「本来の」意味や比喩的な意味を越えて、諸々の状態の配分のみが存在するようにあらねばならない。それは如何なる領域によっても取込まれない、単に強度だけが問題となる音声でなければならない。

〈注〉

① M. J. Langevert はこの傾向を端的に示すことにおいて今なお影響力をもつ。例えば次の言葉……「我々教育学者は、もう一度我々の仕事の根本的な統一をなしている公理的な意味が、子供の教育という点にあることを認識しなければならない。我々は「専門家」たちの無数の抱負の藪の中に子供を見失うかわりに、どのような両親も持っている責任即ち子供に道を指し示し、その道に従って子供を助けるという責任を我々の上に引き受けなければならない。」(Disintegration and Reintegration of Pedagogy 1958・和田修二訳「教育の人間学的考察」未来社、1966、p.33、下線は原野)

② 種々の *metaphor* や *symbol*、または *initiation* などの概念への還元は教育的リズムを解放するかに見えて、やがてそれを袋小路に追いつみ、〈健全な家庭・地域〉という図式へと囲い込む。民俗学的視点が教育活動に一定の *nostalgia* に満ちた刺激をもたらしたとしても、教育の閉塞状態を抜け出すエネルギーを与えないのもそのためである。

- ③ 「有効性のみを追求する現代社会を批判する」という見解がある。しかしそのような批判は有効性のみを追求する社会を再生産するのに有効な役割を果たしている。次のような J. Baudrillard の言葉はまさに正鵠を射たものであろう。「資本は自分自身への告発を食って生きるわけで、この告発は弁証法的な刺激としてのフィード・バックでもある……学校制度の自立性と称されていることのおかげで、学校制度は階級社会の構造を効率的に再生産できるのであるが、経済学の場合でも同様で、経済学の自立性と称されるもの（より適切に言えば、経済の決定審級として価値）のおかげで、経済学は資本の象徴的なゲームの規則や資本による生死を制する支配を効率的に再生産できる。資本の支配は、経済学をたえず媒体・アリバイ・イチジクの葉として助長するコードに根拠をおいている。」J. Baudrillard「象徴交換と死」今村・塚原訳筑摩書房1982, p.65f
- ④ 「自由」の追求は communication 可能なコードへの従属へとつれもどす。自由獲得のために人々の同調を得ることはそうしたことなのだ。他人も理解できる枠組みへの強制こそ人々を閉塞せしめているというのに。cf. G. Deleuze, F. Guattari, KAFKA 1975字波・岩田訳, 法制大学出版局, 1978, p.11
- ⑤ G. Deleuze, F. Guattari, KAFKA 1975上掲訳 p.16
- ⑥ これを子供の側から言えば、彼らはまるで出産と同時に能率手帳を手渡され、スケジュールをきっちりたてた生活を要求されているかのようである。
cf. G. Deleuze, F. Guattari, KAFKA 1975上掲訳 p.18
- ⑦ G. Deleuze, F. Guattari, KAFKA 1975上掲訳 p.20
- ⑧ 動物を模倣すること……それはその動物の形姿・行動・生態などへの意識の還元を意味する。それをなぞっていくことが常識的なものであれ、学問的なものであれ、或る metaphor の中への力線が形成され、閉塞するという限界をもつ。(ecology 運動にもこの限界を指摘できる面があるように思われる。)
- ⑨ 例えば Nietzsche, Zarathustra の「挨拶」を参照
- ⑩ G. Deleuze, F. Guattari, KAFKA 1975上掲訳 p.22
- ⑪ F. KAFKA,「あるアカデミーへの報告」
- ⑫ G. Deleuze, F. Guattari, KAFKA 1975上掲訳 p.44
- ⑬ G. Deleuze, F. Guattari, KAFKA 1975上郡訳 p.49
- ⑭ 現代では差異はその深淵を垣間見る機会として性格を失い、すべてが些細な差異としての相貌を帯びるようになる。例えば「父殺し」という新聞の記事がドフトエフスキーの手により「カラマゾフの兄弟」に見る如き「神の死」という深淵を覗ききっかけとなりうるような事がなくなり、すべてがジャーナリスティックに処理されるに至る。
最近の幼児殺害事件を見よ。そして些細な処理法を「教育論議」が引き受けている。
- ⑮ G. Deleuze, F. Guattari, KAFKA 1975上掲訳 p.37ff

(1989年10月31日 受理)